

Philologie de la civilisation japonaise

Cours du 25 février 2013

Les « Poèmes des dieux »

Jingi-ka

de l'*Anthologie millénaire*

Senzai-waka-shû

- 1^{ère} partie -

- Christina E. Olinyk

*Poems of the Gods of the Heaven and the Earth :
An Annotated Translation of the Jingika Book of
the Senzai-shû.*

Sept. 2010

University of Massachusetts

98 p.

- 1255 上東門院

後一條院の御時はじめて春日の社に行幸ありけるに一
條院の御時の例をおぼしめしいださせ給うてよませ給
うける

三笠山さして來にけり石の上

ふるき御幸のあとを尋ねて

- 1256 大納言經輔

長元八年關白左大臣歌合志侍りけるのち左方の人よろこび
に住吉に詣でゝ歌よみ侍りけるに左の頭にてよみ侍りける

すみ吉の浪も心をよせければ

むべぞみぎはにたちまさりける

- 又聞成菩提

D'ailleurs, en l'entendant, je réaliserai l'Eveil

73. たれかしらんわか身を人にいひかけて
よせくる浪の底のふかさを

- 1257 後三條内大臣＝藤原公教

白河法皇熊野へまゐらせ給うける御供にて志ほやの王子の御前にて人々歌よみ侍りけるによみ侍りける

思ふことくみて叶ふる神なれば

鹽やに跡をたるゝなりけり

1258 崇徳院御製

百首の歌めしける時神祇の歌とてよませ給うける

道のべのちりにひかりを和げて

神も佛のなのるなりけり

和光同塵

- 1259 藤原清輔朝臣

天の下のどけかれとや榊葉を

御笠の山にさしはじめけむ

• 84 きのとものり 紀友則

桜の花のちるをよめる

久方のひかりのどけき春の日に

しづ心なく花のちるらむ

常・寂・光 (土)

- 公任

出入と人はみれどもよとゝもに

わしの峰なる月はのどけし

- 慈円

常在靈鷲山

90. やみのよるも昼をもわかすわしの山

いつものとかに有明の月

- 1260 大納言隆季

中納言家成住よしにまうでゝ歌よみ侍りける時よめる

神代より津もりの浦に宮居して

經ぬらむ年の限志らずも

1261 右大臣

大納言辭し申して出で仕へず侍りける時住吉の社の歌
合とて人々よみにけるに述懐の歌とてよみ侍りける

數ふれば八年經にけり哀れわが

沈みし事は昨日と思ふに

その後神感あるやうに夢想ありて大納言にも還任して侍り
けるとなむ。

- 藤原良経

わしの山やとせのゝりをいかにして
この花にしもたとへ初めけん

- 慈円

139. うれしくも仏のみ子のゆかりとて
八歳ののりをふたたひそきく

- 1262 皇太后宮大夫俊成

おなじ歌合に

徒にふりぬる身をもすみよしの

松はさりとも哀志るらむ

• 1263 右大臣

おなじ歌合に社頭月といへる心をよみ侍りける

ふりにける松物いはゞとひてまし

昔もかくや住の江の月

- 其後當作佛 號名曰彌勒

8. わしの山入行月のあとに又

いつへき御名をきくそうれしき

- 從冥入於冥

48. たのむへしやみよりやみにうつるとも

影にかけそふ月も出なは

- 俊恵法師

住吉の松の行合のひまよりも

月さえぬれば霜はおきけり

- 1267 權中納言經房

熊野にまうでゝ侍りける時發心門の王子にてよみ侍りける

うれしくも神の誓を志るべにて

心をおこす門に入りぬる

- 慈円

128. みそちあまり三つのちかひの嬉しきは
さまさまになるすかたなりけり

94. み山ちやまとひまとはす行ゆかす
思しるこそしるへなりけれ

- 1274 法印慈圓

述懷の歌の中によみ侍りける

わが憑む日吉の影は奥山の

柴の戸までもさゝざらめやは

- 王維. 鹿柴

空山不見人

但聞人語響

返景入深林

復照青苔上